

南仏の小さな村の、いのち育む教育

セレスト小学校訪問記

川口幸宏

「パリを見てもここを見なければフランスを知ったことにならない。」

「私たちはラ・シオタの近くの村(コミューン)に住んでいます。マルセイユからかなり離れたところにあり、いつも太陽が輝いています。雪はめったに降りません。」⁽¹⁾と村の子どもが書いている村・セレスト(Cyreste)を訪問した日は、ちょうど、フランス統一地方選挙の投票日(2001年3月)。宿泊施設がない村なので、村と小学校が、かつて職員住宅に使っていた数室の空き部屋⁽²⁾を急ぎよ、宿として提供してくれた。その宿の下の部屋が投票所の一つ(日常は教室)。そこに到着したのは夕刻の6時、村の職員が「投票はもうすぐ終わりだけれど、もう投票者は来ないかな。」と、忙しなげにしていた。にもかかわらず、私と、通訳をお願いしたパリ第5大学学生の瓦林亜希子さんの大荷物を見かけて、奪い取るようにそれらを取り、それぞれに割り当てられた部屋に運んでくれた。こんなところにも、フランスのボランティア精神を発見することができるのである。

翌日、マリー・アンドレ(M^{me} Marie Andree)校長に案内されて村役場に挨拶に出向くと、新旧入れ替わった村長が懇切丁寧に向かえてくれ、「この村から、戦前、中国に行き、それから日本に行って、日本の文化をいただいてきた人たちがいる。あなた方は、戦後初めてこの村に来た日本人だ。大歓迎です。」という。そう言えば、村の中を歩いていると、誰もが振り返って「ジャポネ、ジャポネ。」と言う。すでに村には私が訪問

するということは知れ渡っていたようであり、誰一人「シノア」(中国人)とは言わなかった。もともと、物珍しいということは必ずしも、「歓迎」ばかりが待っているわけではない。露骨な排他的な言動を示す人も少なくない。もちろん教師の中にもそれはいる。だからこそであろう、これから述べることになるセレスト小学校のただ一人のフレネ教師、リ



[1] 北海道・苫小牧市の泉野小学校2年2組(S教諭担任)に宛てて書かれたセレスト小学校CM2(マダム、マリー・アンドレ担任)の子どもたちが書いた寄せ書きより。

[2] セレスト小学校は1880年に設立されている。旧職員住宅と書いたが、設立当初から半世紀以上の間は、男子学校の教室の役割を果たしていた。その当時の面影が残る一室では、新しくカリキュラムに組み込まれた英語の授業用の教室として、今日も使用されている。私が宿泊する間は英語の授業は他の教室で代替された。

リュセット・アゴスティーニ(M^{me} Lucette Agostini)先生の存在が大きい意味を持つことになる。

セレスト小学校は、CP(児童数 23 名)、CP/CE1(同 26 名)、CE1(同 29 名)、CE2(同 32 名)、CE2/CM1(同 26 名)、CM1(同 30 名)、CM2A(同 24 名)、2F(同 28 名)、教員は校長(兼クラス担任)を含め 8 名、その他用務のための職員が 1 名いるがそれは村の職員である。フランス共和国の「学級定員基準の 30 名」を越えるクラスがあるが、校長の話では、「CP クラスは法によって 25 名と定められているが、その他は状況次第。現在の児童の実体からすればほとんどが過大学級と言える。」とのこと。児童の実体というのは、「20 名につき 1 名の割合で指導困難児童が存在し、学習困難児童数はもっと多い。両親の離婚による精神の不安定、子どもを取り巻く文化にも問題がある。そしてより困難なのは親の子育てに関する意識と態度の急激な変化である。」ということであった。数値をあげて説明を受けたのはここでが初めてだが、児童の実体・態度の変化、社会文化の急激な変化についての認識と分析は、都市部であろうと周辺地であろうと、また過疎地であろうと変わりがなく、フランス共和国の学校を取り巻く大きな問題であることを知る事ができた。「教科書を使うか使わないか、どの教科書を使うかは、それぞれの教師の裁量権ですので、校長はそれぞれの教師から相談を受ければアドバイスをすることができます」との校長の話のなかで、セレスト小学校では 8 人それぞれがそれぞれの教育信念にのっとり教育実践を進めていることを知る事ができた。フレネ教育法を取り入れているのはリュセット先生のみ、その理解者でありそこから学び取るものを見つけようとしているのは校長と CM1 クラスの先生の二人。他の先生方との関係は「他の学校に見られないほど良好な人間関係で、しばしば 8 人が話し合いをすることができるし、互いに尊敬しあっている。」とのことだった。

確かに、「会議」の行われた昼食会へ校長から誘われて参加し、にこやかに会議が進められている様子を知ることができた。ただ、私の印象に過ぎないのだけれども、男女教員の 2 名は、私と交わす挨拶もきわめて儀礼的であり、初日に弱々しい握手を返してきただけで後はまったく握手を求めてくることはなかったし、顔を合わせても目を背けていた。日本人が嫌いなのか、外国人が嫌いなのか、リュセット・クラスへの参観者が嫌いなのか、そのあたりのほどは分からないが、少なくとも、私は歓迎されていなかったことは確かである。これは子どもたちにも微妙に影響を与えており、その二人のクラスの子どもたちは私を完全に無視、声を掛けても返事さえしなかった。他のクラスでは「私たちのところにも来るの?」「先生が行ってもいいって言ったら行こうと思っているけれど、先生にいろいろ考えがあるみたいだよ。」「来ないの。残念だよ。」などと会話をしたり、「リュセットのクラスの子に聞いたんだけど、日本では…」などとの質問を投げてきた。こうした子どもの姿は 1 週間も同じ校庭で生活していると見分けられるようになるものである。そして同時に、校長の説明する児童の実体を幾場面か目にし、そのたびに教師が固有名詞(問題行動児の名前)を呼ぶ声を耳にし、時には「シーッ」

という全体を制する指示さえ耳にせざるを得なかった。また、教師の見ていないところでの子どもたちの、遊びという感覚を越えた乱暴な振る舞いの数々に、思わず割って入っていきたくなる衝動を抑えるのが大変だったこともある。それらは、パリでもその他の地域でも、幾たびか教師の嘆きとして聞かされていた、まさに「荒れている」子どもたちの姿であった。

朝 8 時半、ベルの音が響く。「朝始まる前や休憩の時間だけに許されているんだよ」と、ある男の子から説明を受けた、歓声を上げ、それぞれに思うままに遊び回っている子どもたちが、それぞれに、教室入り口前の校庭に男女別の列を作る。それから教師が引率して教室に入る。プロヴァンスにあるヴァンスの



〔国立〕フレネ学校以外で見かけたフランス共和国共通の光景である。朝の始業時、朝の中休み、昼の終わり、昼の中休みごとに、これが繰り返される。

音楽も鳴らないし、全員がリズムを揃えて整然と行進するというのではないけれども、教師の許可がなければ絶対に教室に入ることができないことや男女別に教室に入るというのは、フランスの古い教育慣習である。私は、もちろん自発的にだけれども、リュセット・クラスの男児の列の最後部に並び、子どもたちと一緒に教室に入る生活を 1 週間過ごすことになる。時には「YUKIHIRO、ここへ来てよ」という「お誘い」を受けて、子どもたちの間に入りこむこともあるけれど。



CP / CE1 の日課は、おおよそ、午前中が朝の発表とそれを受けての

「読み書き」(90 分)、中休みの後は算数(60 分)、午後は個別学習(90 分)、中休みの後は教師からその時々の作業課題を投げ入れ、またストーリーテリング、学級自治に関することなどが行われる(60 分)。教科書はまったく使用せず、学習カード、図書類などが学習材となっている。朝の発表は、教室前面の黒板前に、教師を

中心として、全員が半円形の小さな輪を作る。教師から「今日、発表をしたい人は？」との問いかけに、つねに 10 人以上の手が挙がる。教師は挙手者に対して、発表順を指

名。挙手した者は順次、口頭で、あるいは図書で、あるいは実物で、発表する。子どもたちから発表に関しての質問や意見はもちろん出されるが、教師から、発表に関する補足的な説明が必ずなされている。私も、事前にリュセットから、「あなたも発表する用意があると、手を挙げてくださいね。」と言われていたので挙手。前回訪問時（2000年12月中旬）に子どもたちが私の名前をひらがな・カタカナでなぞり書きする学習をしたので、今回は「アイウエオ表」を携えてきた。また、リュセットの学校間通信の実践に多少でも具体的に触れることができればと思い、苫小牧・泉野小学校S学級の「手紙」を携えてきた。その旨をリュセットに告げてあったので、彼女は、それらを子どもたちに紹介してくださいと言われていた。

アイウエオ表は、左側にひらがな（カタカナ）、右側にローマ字表記をした手作りのものである。しかしローマ字表記はフランス語の発音体系からすると有効ではない。たとえば、aiueo は aioueo のように表記しないと日本語発音に近いものにならない。その他、いろいろと問題点が、子どもの前でアイウエオ表の読み方をするたびに発見されていく。「万国共通のローマ字表記」などと教わり、またそうも信じ込んできた私の「基礎教養」のつたなさが暴露される。しかし、まさにこの、異文化に触れることによって自文化をさらに知ることができるというささやかな経験の積み重ねこそが、私の中の固い自文化像を柔軟にしてくれるのだろう。アイウエオ表は、朝の発表終了後コピーが1部ずつ配布され、子どもたちの学習材として使用されることになる。

日本の子どもたちの「手紙」についての紹介を終えた後、教師から再説明。子どもたちの視線が一斉に「手紙」に注がれる。S学級の「手紙」は、イラスト入りで、自己紹介、学校の様子、街の様子、文化の紹介、それから「フランスについての質問」からなっている。小学校低学年の子どもに分かりやすいこと、フランス文化についての不十分な理解から出ているものを採り上げ、子どもたちに紹介した。子どもたちは、まず、作文用紙に驚き、右から左へと縦に書いて行くことに驚いていた。「フランス語と日本語では、ぜんぜん、書き方が違うんだ！」次に、漢字・ひらがな・カタカナという三つの文字種を使い分けていることにも驚いている。「ぼくなら、日本の学校では勉強できないよ。」と言って笑わせている子ども、「日本の子どもは、どのぐらい、文字を覚えるのですか？」と真剣な目で質問をしてくる子ども。一人称の呼び方が、男児（男子）が「ぼく」、女児（女子）が「わたし」と使い分けていることなどは、「どうして、男と女とは、そういう風に区別するの？」と質問を受け、返事に窮してしまった。おそらく、その後、調子に乗って、一人称には「おれ、わし、ぼく、わたし、わたくし、わたい、うち...、もっとたくさんあるよ」などと言ったら、フランスの子どもたちにとって日本という国は、「個」という存在はきわめて複雑で、自分でも説明がつかない国なのじゃないか、などと思われてしまったことだろう。

「手紙」に関しては、もっぱら日本の子どもの質問に答えてもらった。

「フランスパンという名前のパンはないよ。日本パンという名前のパンがあるの。」

「フランスの郵便箱は黄色だよ。どうして黄色だかは知らない。」

「フランス全体のことはまだ知らないけれど、セレストはあまり雪は降りません。でも、スキーができるところは、すこし遠いけれど、あるよ。」

「動物園はマルセイユに行けばあるよ。キリンとか象とかがいる。」

「フランスーきれいだと思う、海も山も。...でも、ぼくはフランス全体に行ったことがないから、本当のことは分からない。」

「(緯度が苫小牧とほぼいっしょだということを知り、地図を確認して) どうして北海道には、そんなにたくさんの雪が降るのかな。」などなど^[3]。

翌火曜日の「朝の発表」では、子どもたちから「日本」について質問が出された。

「日本の家は、やはり石造りなのですか？」(回答「木で作っているんだよ」)

「フランスの家は地面を掘って石を積み上げていくんだけど、木の家だと、どうやって建てているんですか」

これらの質問は、つい最近、南フランスでかなり大きな地震があったことと関係している。それぞれの建築文化には、地震に対しての知恵が含まれている。リュセット学級では石文化の地震対策の知恵についてすでに学んでいた。そのことから、日本の建築文化についても知りたいという質問になったわけである。私は、簡単な構造図を黒板に書き、礎石の上に家を建てるという説明をした^[4]。続いて「もし授業中に地震が来たときには、日本の子どもたちはどのようにするのですか。」これには瓦林さんの経験を語ってもらった。「椅子には座布団がいつも敷いてあって、それをまず頭にかぶります。それから机の下に潜り込んで、地震の揺れがすこし収まったら、先生の合図で、座布団を頭にかぶったまま、安全で広いところに出ます。」さらに、「避難訓練というのはするんですか。」という質問の直後、ベルが鳴り響いた。質問した子どもが「コム・サ」(こんな風に)と笑いながら言う。偶然のことだったが、まさに避難訓練の合図だったのだ。

「ウィ」と答えながら、子どもたちの後について校庭に出る。

避難訓練を終えて教室に戻り再び質問を受ける。「日本には火山があるのですか。幾つぐらいあるのですか。今でも活動しているのですか。」これは、先の地震の際に火山

[3] これらの「朝の発表」の質疑応答は、子どもたちにとって「次の発表」のための動機づけとなる。たとえば、郵便の話に興味を持った男の子が、翌日、イギリスの郵便自動車の模型を教室に持ち込んだ。「日本と同じで、郵便は赤の色です。」と発表していた。

[4] この略図は誤解を与えてしまったようで、昼休みの時、別のクラスの子どもから「リュセットのクラスの子に聞いたんだけど、日本では、家は4つの石の上に木の柱を4本立てて作るんだって？」と話しかけられる始末であった。あわててぼくは、リュセットに、「後に子どもたちに訂正の説明をしてあげてください」と申し入れ、大黒柱という支柱になる柱、それから四周を支える柱、その間にある柱など、いくつもの柱が立てられ、柱と柱の間の壁は、伝統的にはワラクズを練り混ぜた土が塗りつけられてできている、それらが地震の揺れを受け止め、そう簡単には倒れないようになっている、と説明をした。リュセット自身が分かったような分からないような顔をしていたから、その後どのように子どもたちに伝えられたかは、分からない。ただ、リュセットが「それぞれの土地の気候、風土などが家を造る知恵を作り上げていることは、子どもたちは理解できているようですよ」という言葉に胸をなで下ろした。

活動とプレート移動とについてすでに学んでいたことから来る質問である。日本は火山列島と呼ばれるほどで最近も火山活動のために村人全員が避難をしたこと、日本海溝というところが二つのプレートがぶつかっているところだ（地図を示しながら）、と説明した。これまでに参観をしてきた南仏・ヴァンスの国立フレネ学校、パリ 13 区の公立フレネ教室でも火山と地震、プレートの学習をしていた。

自由発表の後、リュセットが、フランス筆記体で、いくつかの「今日の情報」を板書する。これは毎日課のことである。ちなみに、訪問初日の情報は次のようなものであった。

「 2001 年 3 月 12 日月曜日

- － AKIKO と YUKIHIRO が、一週間、私たちといっしょに過ごします。
- － 新しい市長が決まりました。エサヤン氏です。
- － 私たちは日本の子どもたちの手紙を受け取りました。彼らは右から左に、縦に字を書いています。」

翌火曜日は次のようである。

「 2001 年 3 月 13 日火曜日

- － 日本には火山と地震とがあります。
- － 人々は円でお菓子を買います。」

貨単位が紹介されたのには、円硬貨の全種類を持って行って、リュセットに見せたことがきっかけとなっている。子どもから「日本ではやはりフランが使われているのですか。」という質問が出たので、リュセットから「子どもたちに硬貨を見せてやってください」と言われた。リュセットから 500 円硬貨で何が買えるのかという質問を受けた。そこから、変動相場制ではあるけれども、およそ 1 フラン 20 円である説明をし、意識して「1F = 20¥」と板書した。直ちに訂正が入る。「F 1 と書くんだよ。」と。硬貨はリュセット・クラスにプレゼントした。コピーが取られ、子どもたちのそれぞれのノートにファイルされる。

先走ることになるが、15 日と 16 日の「情報」をあわせて紹介しておく。

「 2001 年 3 月 15 日木曜日

- － 私たちは書道に親しみました。
- － 来週、春になります。
- － 午後、森に春を探しに行きます。」

「 2001 年 3 月 15 日に、私たちは、春の兆しを見つけました。：黄色いタンポポがたくさん、黄色いチョウチョが一匹、マルハナバチ（ミツバチの種類）が一匹、アスパラガス一本、小さな葉（木の芽）がたくさん。

ツグミのお話を聞きました。

YUKIHIRO が日本の詩を語ってくれました。

みんなで鏡を使って遊びました。

木の枝に止まっている蟬が見るように、周りを見ました。

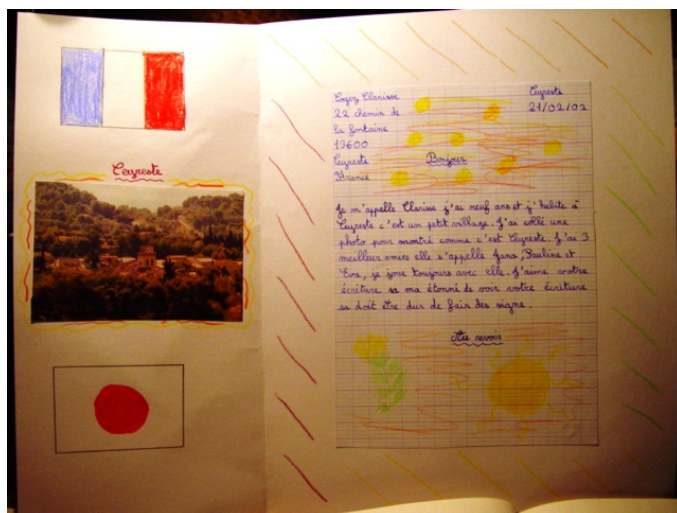
天地逆さにして見たし、石の下のくぼみを調べました。

小さな、跳ぶトリクイグモを見つけました。

すばらしい午後の一時でした。」

このように板書された「情報」を、教師の指示に従って、子どもたちは「読み」「書く」ことができることが最低の学習課題となる。子どもたちは、自分たちの生活が書かれている簡潔な文章を、読みこなし、書きこなし、それにデッサンを添えることで、自分なりの形象世界を作り上げていくのである。もちろん、「自由作文」もなされているけれど、その基盤になっているのは、自分たちと深い関わりのある、興味深いできごと、生活が表現されている、生きたフランス語との出会いとその修得である。このことこそ、フレネ教育法の真髄と言っていいのではないかと、強く思わされる。市民的資質の最大の文化形態は、フランス語を、あらゆる生活形態の中で、生き生きと使いこなす諸能力であろう。さらに誤解を恐れずに言えば、自国語（自文化）を媒介として他世界と出会い、他世界を理解し、そのことによって自己世界を作り替えていく能力と言えようか。我が国の国語教育（言語教育）は、残念ながら、この点においてかなり劣っていると云わざるを得ない。

日本文字・手紙の紹介は、リュセットのクラスにとどまらず、CE1のクラス、CM2Aのクラス（校長、マリー・アンドレ担任）でも行った。CM2Aクラスでは、寄せ書きと一人ひとりの「返事」が書かれ、帰り際に、日本の子どもたちに渡してくださいと託された。残念ながら日本とフランスとの学年暦が異なることもあり、現在のS学級の子どもたちとCM2Aクラスの子どもたちとの間の「学校間通信」へのつながりを持つことはできないだろうけれど、少なくとも、「今を生きる子どもたち」が、ささやかに、海・空・文化あらゆるものを隔てたところへ交信を試みたことは、大きな宝になるのだろう。



翌日の13日火曜日の朝の発表の前、リュセット先生がぼくのところに近づいてきて、「今日は子どもたちと書道(la calligraphie japonaise)を学習したいのですが、できますか？」と訊ねる。書道となると、硯、墨、筆...などとすぐ道具の心配をしてしまうけれど、先生は、絵の具と絵筆と紙、それに彼女が探してきた資料「日本のセレモニー、書き初め」とをぼくに見せる。「日本のセレモニー文化にも触れさせたいので、ただ字を書くだけではなく、フランスのNoël（ノエル：クリスマス）と同じような位置づけに

翌日の13日火曜日の朝の発表の前、リュセット先生がぼくのところに近づいてきて、「今日は子どもたちと書道(la calligraphie japonaise)を学習したいのですが、できますか？」と訊ねる。書道となると、硯、墨、筆...などとすぐ道具の心配をしてしまうけれど、先生は、絵の具と絵筆と紙、それに彼女が探してきた資料「日本のセレモニー、書き初め」とをぼくに見せる。「日本のセレモニー文化にも触れさせたいので、ただ字を書くだけではなく、フランスのNoël（ノエル：クリスマス）と同じような位置づけに



ある、新しい希望に燃えることを形にしたセレモニーとして、子どもに教えたい。」という。後で知ることになるけれども、先生の頭の中には、「来週になると春になる」「今週末の土曜日にはカーニバルがあり、子どもたちは、新しい希望を託して仮装をし、町を練り歩き紙吹雪を投げ⁵⁾、最後にはわら人形を燃やし、嫌なことを書きつづったものをいっしょに焼き捨てる」という一連の流れがあったようである。「だから、わたしは、日本の子どもたちと同じような書き初めを、子どもたちに経験させたいのです。どんな言葉がふさわしいですか？」と言われる。

リユセット実践との兼ねあわせも考え、「元旦」「はつ日の出」「はつゆめ」の他に「きぼう」「平和」、それと昨年訪問したときに子どもたちに教えた「一二三四五」を選んだ。絵筆・絵の具での書は初めての経験だけれど、何とかなるだろう。「全部を、黒板の上で、書いてください。書く姿を子どもたちに見せたいのです。できますか。」

先生に促されて、瓦林さんにも協力を求めて、先の五つの言葉と数字をと書き進めた。筆につける絵の具の量の加減がつかめず絵の具が垂れるということもあったけれど、何とか書き上げた。子どもたちは、まず、その中から自分の好みを選んで、書き始める。書いている姿を見ていて気がついたことだが、フランスの子どもにとって、日本文字は、まるで



デッサンのように思えるらしく、書き順などはまったく意識がなく、形をデッサンよろしくなぞっていく。もちろん、今自分が書いている「言葉」にはどのような意味があるのかは、あらかじめ説明を受けているわけだし、読み方についてはフランス発音方式で板書されているので、まったく無為に書き写しているわけではない。しかし、その書いている姿は、書き順という日本語文字文化の固有性を無視すれば、「形(型)より入り形(型)に出る(出ず)」という、日本各技能の伝統的な学習方法そのものの姿である。

子どもたちが書いている間に、先生が「このクラスのジュリエットが今日、誕生日なので、何か記念に書いてやってください。それから、ついでにわたし(クラス)にも書

[5] フランス各地で行われるカーニバル。幸いにも、それに参加することができた。仮装用具を持っていないことを知ったリユセット先生は、町の柔道家に依頼し、柔道着を2着用意してくれた。私にとっては40年ぶりに「黒帯」を締めた姿となった。なお、子どもたちが投げるのは、伝統的には卵なのだが、近在でそれが残っているのはラ・シオタ (la Ciotat) の学校のみであると、子どもから説明を受けた。

いてください。」との申し出があった。

「ジュリエットちゃん / おたんじょうびおめでとう / 二〇〇一年三月一三日」

「セレストの子らに萌ゆるや平和筆 / 康*」

「平和のわき出る生命 / あきこ」

ジュリエットには後に開かれた誕生会でぼくの手からプレゼント⁽⁶⁾、先生にはできあがってすぐにプレゼントしたが、他のクラスの参観に出かけて帰ってきたら、教室入口のドアにそれらが貼られていた。そして、子どもたちの書作品は、二本の竿に張り巡らされ、天井のライトからつり下げられていた。

子どもたちから質問が出る。「日本の子どもたちは、毎日、こうして筆で字を書いているのですか？ぼくが読んだ本ではそうだと書いてあったけれど。」

子どもたちに分かりやすく説明するにはかなり複雑な文化状況もある。瓦林さんに頼んで、リュセット先生にぼくの方から説明し、それを先生から子どもたちの説明していただくという手順をとることにした。しかし、通訳者本人自身が、「おばあちゃんの世代までは日常的に筆を使って勉強していたのではないか」という「お粗末な」日本の学習史理解しか持っていないことが判明し、改めて、自国文化についての理解とは何であるのかを思い知らされる羽目になる。「今では、書は、書き初めなどのセレモニー、それと芸術表現の一手法として認識されている程度ではあるけれど、日本の学校で書は教えています。西洋文明に触れる以前には、書は学習道具として必要なことでしたけれど、近代学校がはじまってからは石板・石筆が低学年学習道具であったのはフランスと同じです。やがて鉛筆に代わります。」

他の2クラスでも書の指導を依頼されたが、それらのクラスでは、自分の名前を日本文字で、かつ、書でしたためる、というものであった。この書の学習は、子どもたちにとって家庭での話題となり、いくつかの家庭では、家族揃って、アイウエオ表で音を拾いながら、それぞれの名前を絵筆で書いたということである⁽⁷⁾。そのような情報を耳に

* 「康」というのは、私のエッセイペンネーム「瀬田庫司」からとったものである。

[6] ジュリエットのおかあさん手作りのケーキをみんなで分けていただく。もちろん、フランス語・英語で「ハッピー、バースディ」を歌い、ローソクの火を吹き消すというセレモニー付である。それだけで終わるのかと思っていたら、男の子全員がジュリエットの頬にキスをし祝福するのだという。にこやかにその様子を眺めていたら、YUKIHIROもキスをしなさい、と言う。生まれて初めて、フランス少女にキスをするという光栄の一時をいただいた。翌朝、ジュリエットが「サ・バ？」(元気?)と言って近づき、ぼくの頬にキスをしてくれた。フランス風の親しい間柄で交わされる挨拶なのだが、まったくなじんでいないぼくとしてはただ赤面するだけであった。ジュリエットからはさらにすばらしい「お返し」のプレゼントをいただいた。彼女がとっても好きで、大切にしている本を、サイン入りで、いただいたのだ。

[7] リュセット先生のお嬢さんが妊娠中。女の子であること、すでに名前が付けられているということが、招かれた晩餐会の場で紹介された。「日本では、産まれた子どもに名前を付けるセレモニーがあります。墨筆で名前を書いて部屋に貼っておくのです。」と話をしたら、「ぜひ、それを、産まれてくる子どものためにしてください」と、家族全員から依頼された。命名の儀式は、名付け親と共に、そして家族ゆかりの、社会的にそれなりの地位を持っている人が墨痕鮮やかに書命名をするという大変重大な儀式である。日本人感覚としては、とてもそのような大役を引き

すると、リュセット先生の、「他の文化に寛容であることは人間としての資質で、非常に大切な事柄です」という話が、具体的な姿で、セレスト村で広がっているのだな、と感ずることができるのである。ただし、私たちが、日本社会で使っている「寛容」という言葉と、リュセット先生の口から出される「寛容」という言葉との間には、かなりその意味するところが異なることは書き添えておかなければならない。「異なる他者を受け入れる幅広い心」という道徳主義の我が国では、自己をさらに深く理解するという意味内容は霞んでしまっているのである。

ささやかなことかもしれないが、リュセット学級では、ひらがなに触れ、それを筆で書くという学習がきっかけとなり、CP の子どもたちが、初めてフランス筆記体文字をノートに書くという学習に発展していつているのである。新しい文化との出会いがきっかけとなり、自分の持つ文化をさらに発展させていくという経験の積み重ねこそ、「寛容」の理解と実践につながっていくのだろう。

それにしても、小学校低学年という発達段階から、「出会い」をきっかけとした、あらゆる「世界」への理解、文化「寛容」を育てることを大切にしているフランスの「市民的資質形成」の教育は、我が国の、「近から遠へ」「まずは近から」というペスタロッチの教育思想の、誤った実践的理解に形式的に縛り付けられたカリキュラムとはまったく異なっている。「市民的資質」とは、どのような市民であろうとも身につけていなければならない、「自己以外の世界についての理解を充分になし、実践的に交流することのできる諸能力」であり、それは、小学校に入れば直ちに「学ぶべき内容」とされている。

さて、15 日木曜日全日は、当初、「森の学校」の予定であったが、校長からの強い要請があり、午前中は校長のクラスで日本の子どもたちの「手紙」の紹介と、それに関わる質疑の学習が急きょ組み込まれ、午後の半日だけ、「森の学校」の学習となった。学校から徒歩で約 30 分。フランス共和国は森林に関する規制が厳しく、遊歩のための道は解放されているが、車は一切禁止である。セレスト村の山々は岩山であり、かつ土壌が木々を育てるのにふさわしくない。松の木など悪環境でも育つ樹木や灌木の山である。子どもたちの最後尾について、「春を探す」テーマの、教育史的な呼び方をすると「散歩科」に出かけた。これもまた、ペスタロッチやセレスタン・フレネが、大切にしている学習活動である。そして、リュセット教育実践の 2 大柱、すなわち、学校間通信と並ぶ重要な、平和と寛容、そして想像力を育む活動の一つである。

受けることはできないと思ったが、こういうセレモニーそのものも廃れてきており、瓦林さんでさえ知らない事実がある。お受けした。筆がないのでマジックであったけれど、「命名 リュシィ YUKIHIRO 書」「命名 りゅしい 書あきこ」の 2 書がリュセット家にプレゼントされた。日本の子育ての知恵として「複数の仮親が実親と共に共同で子どもを育てるという精神があること、それは共同体で子どもを育てるといふ日本社会の伝統を形にしたものであると同時に、子どもが丈夫で元気で、りっぱな人間になるようにという願いが込められている」と説明した。もちろん、今日では、このような考え方、実際は廃れつつあること、それは、共同体の崩壊・変質と密接に関わっていること、なども付言した。

道すがら、子どもたち（当然、私たちも^[8]）は、さまざまな「春の兆し」を見つけ、声を挙げて教えてくれる。「あ、黄色いチョウチョが飛んでいるよ」「この紫色の、アスパラガスのようなものも、春だから出てきたんだよね。」「木の枝に、たくさんの、小さな葉っぱの芽が出ているね。」「ミツバチがいるよ、刺されるとたいへんだから、静かに見ようね。」などなど。

目的地は、あらかじめ許可を得ているエリア。片面が岩山、片面が木々、雑草の生い茂るところとなっている。子どもたちは、岩山のエリアでは石を動かしその下の「春の兆し」を探し、生い茂るエリアでは、草木に「春の兆し」を探している。たとえ「春の兆し」の具体を発見したとしても、絶対にそれらを手にし、リュセットのところに持っていくことはない。彼らの「心の中」にしっかりと刻みつけるだけである。「どんないのちにも無駄はない。それぞれに生きているのを、人間の理屈のために、いのちを奪ってはならない」というリュセットの「自然観」「生命観」から来ていることである。ジュリエットの母親と話す機会を得た。彼女は「はじめ、こういう活動の意味が分からなかった。しかし、家族で山に遊びに行ったとき、子どもが、非常に活発に、かつ興味あふれる山遊びをし、次から次へと、いろんな発見をしていく、そして家に帰ったら、その発見の話をし、調べたり、文や絵にかいたりする。そんな子どもの姿から、親として、たくさんのことを教わりました。そして、親子の間の会話がすごく豊かになっていきました。リュセット先生の考えが、今ではとてもよく分かるし、嬉しいと思っています。」と言う。彼女は週二回、本屋でパートの仕事をしているが、リュセット教育がその仕事にも有効である、とも言っていた。

休憩をはさんでしばらく子どもたちは活動していたが、大きな石の上にリュセットが腰を下ろすと、やはり半円形に子どもたちが座る。リュセットが「お話し」をはじめた。お話しは次のような内容であった。

「一人の男の人が山に迷い込んできました。生活に疲れ果てていることもあり、たまたま荒れ果てた、小さな山小屋がそこにあるのを見つけて、男はそこに住もうと思いました。すると頭上の木からツグミが、だめだよ、人間はすぐ山を荒らして、私たちの住むところを壊してしまうから、と言いました。男は、ぼくは絶対にそんなことはしない、みんなのことを大切にすると、言いました。ツグミは言います、じゃあ、あなたの言葉を信じましょう。すると、山小屋はりっぱな家になり、奥さんも三人の子どももそこにいました。男は大喜び。平和な日々を送っていました。ある日、ツグミは、これから大切な用事があるので出かけなければなりません、わたしの大切な子どもたちがいますが、けっして巣の中を覗いたり、近づいたりしないで下さい、誰にもそうさせないでください、と言って出かけました。しばらくして、男の子どもの一人が、ツグミの巣を見

[8] クラスの親一人（ジュリエットの母親）、授業研究に来ていた教員志望で教育実習中の男子学生、それと瓦林さんと私とが、子どもたちの「語り」を受け、必要に応じて答えたり、こちらから問いを出したりする役目を仰せつかった。もちろん、通行上の安全確保の意味もある。

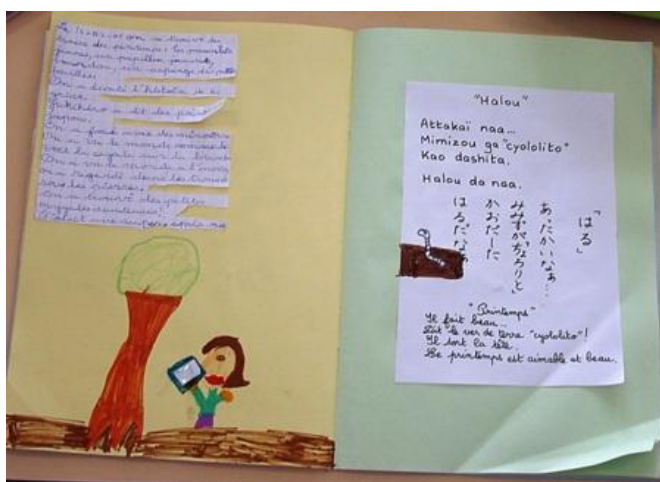
て、あの中に何が入っているのか見たいと言いました。男は絶対にだめだ、ツグミと約束したことだ、と言って許しませんでした。でもその子はこっそりと、巣の中を覗き、卵を見つけ、一つ手に取りました。そして落として割ってしまいました。なんということをしたんだ、と男は怒りますが、男の子は、こんな小さなものだし、あと二つ残っているんだからいいじゃないか、と言います。…次男も巣を見つけ、卵を手にし、そして割ってしまい、あと一つ残っているからいいじゃないか、と言います。…三男も巣を見つけ、卵を手にし、そして割ってしまいました。もうあとには残っていません。でも三男は、ツグミがまた卵を産めばいいことじゃないか、と言います。…ツグミが帰ってきて、すべてを知りました。男は、申し訳ないことをした、でも、ツグミ、あなたはまた卵を産めばいいことだと思う、とツグミに語りました。すると、男は再び、奥さんも子どももない小さな、荒れ果てた山小屋の側の石に腰を下ろしている姿に戻ってしまいました。そして、男は、石の側に落ちていた木の枝を杖にして、よろよろと元の道に戻っていきました。」

「お話し」のあと、数名の子どもが暗唱した詩を発表。続いてリュセットが、YUKIHIROに日本の子どもの詩を紹介してもらいましょう、という。何の準備もしていない。とりあえず、リュセットの腰掛けていた大石に進み行く間に、「春」にちなむ子どもの詩をいくつか思い出した。戦前の作品ではあるが「つくし」という短い詩⁹⁾、戦後、



「たいなあ詩」運動の中で生まれ、教科書検定ではねられた「かわ」という詩、それから、大学院生時代に居住地のおかあさん方と進めていた自主学校（「竹学校」）の中で生まれた「春」という詩である。「つくし」の作品は通訳に手間取ることもあり、その間に、「わけは分からなくていいですから、日本の言葉のリズムを楽しんでください。」という前置きをして、「サラ サルル ピル ポル ドブル ポンポチャン」

（「かわ」より）を二度繰り返した。先生と一人の子どもが「川が流れる音だ」と叫ぶ。まさにその通りである。これには驚いた。そして、音の感覚というのは、言語が異なるとしても、そのリズムが



[9] 長野県の若い女教師の「生活詩」指導の中で生まれた作品。「つくしがでた もう春だといって でたのかな」

共通のものとして現れるのだということを知ることができた瞬間であった。「つくし」は通訳困難ということが分かり、次に「あったかいなあ みみずがちよろりとかおだした はるだなあ」という詩（「はる」）を紹介した。この詩はリュセットがたいへん気に入って、翌日の学習材として使われることとなる。

詩の学習のあと、リュセットが子ども一人ひとりに鏡を渡しはじめた。何をするのかと思って彼女の指示するとおりに、私も鏡を操作した。まず鏡面を下にして眉のところに当てる。すると地面が見える。こんどは鏡面を上にして目の下に当てる。すると頭上が見える。物理的な説明ではそうなるわけであるが、「目線の変更」というこの活動は、今まで自然体で見ていたのとは様子が異なって写る。リュセットが「鏡面を下にして見るのは、木の上にいる鳥などの生物が地面を見ているのと同じです。鏡面を上にして見るのは、地面にいる虫たちが上を見ているのと同じです。」と説明する。「さあ、みなさんも、しばらく、鳥や虫になったつもりで、あたりを鏡で見てください。」

子どもたちがあっちへ行ったりこっちへ行ったりと場所を移動しながら、それぞれの目線の変化に伴う景色の違いを確かめていた。

続いて、二枚の鏡の縁をくっつけあって、互いに見えるものを見てみましょう、その次にはもっとたくさんの方が鏡をくっつけあって、見えるものを見てみましょう、との指示。見慣れているクラスメートの顔が、逆さまになって写って見える。いつもとは違った表情を、鏡を媒介として発見する。その次には、葉っぱの裏に鏡を当てて見る、石の下に鏡をしのばせて見る。これは、対象物を動かさなくても観察できる方法である。毒性の強い植物や危害を与える生物の観察に有効な方法との説明がある。子どもたちは、鏡を使っての野外観察、対象観察の方法を知ると、あちこちに散らばり、さまざまな「新しい発見」をしてくる。とげとげで痛い葉っぱの裏側が観察することができた、やっぱり葉っぱの裏側にもたくさん棘があったよ、鏡に光が当たり、それが暗いところを照らすのではっきり見えたよ、などと私に教えてくれた。リュセットの「森の学校」の実践のエキスをたっぷりいただいた午後の一時であった。

翌日の16日、いよいよ参観の最終日である。朝の発表を簡単に済まし、「森の学校」の学習の纏めに午前中を費やした。「両手を目に当てて目を閉じて、昨日の森でのことをゆっくりと思い出しましょう。」子どもたちが次々と発表していく。それがリュセットの手によって板書されていく。その内容は先に書いておいたことなので、ここでは省略する。子どもたちはそれを「読み」「書き」し、デッサンを添える。何人かの子どもが私のところにデッサンを見せにきた。「YUKIHIROのことを書いたよ」と言う。見ると、石の上に座っているぼくの姿が描かれている。詩の発表が印象深かったようである。

午後の個別学習時に、自由作文に取り組む子どもがいた。ある子は森の学校のことを綴っている。「春の兆しをたくさん見つけました。わたしは春が大好きです。」日本の作文教育などから見ると、何とも短く概念的な文章だけれど、フランス共和国の文章作

法などの表現法は、簡潔にして無駄を省き、一人ひとりの思いが込められていることが推奨される。おそらく、この両国の表現法の違いは、日本が表現をもって学習の終着とするのに対し、フランスが表現はその後のディスカッション等々コミュニケーションの出発となる、という違いである。「物言えば唇寒し」の我が国は、日常のコミュニケーション過程では自分の思想・哲学を語ることを可能な限り控え、その代わりに「文章」（書くこと）という方法でもって自己を語る。このような間接的なコミュニケーションならば自他共に「傷つく」ことが少ない、ということになる。しかし、間接的コミュニケーションである場合には、直接的コミュニケーションで時間をかけ言葉を数多く使って「説明」と同じほどのエネルギーを割いて、自己を語らなければ他者から理解を得られない。それが、「詳しく」というリアリズム手法を生み出す伝統となった。

それに対してフランス文化では、日常的な直接的コミュニケーションが尊ばれ、その場、その時に、言葉をあれこれと使い分け、身体表現を豊かに用い、説明をすることによって、他者理解を得ようとする。そのような生活文化の中に生きている子どもからすれば、私と瓦林さんと学習生活を一週間にわたって行ったことは、子どもにとっては、**On a des amis du Japon.**（私たちには日本の友だちがいます。）というたった一文の中にすべてを込めていてかまわないのだ。そこからまた、コミュニケーションが広がり、



深まっていく日常があるのだから。そして、この両国の文化性の違いは「自律」ということに対する哲学的・実践的な差異となっているように思われる。この点についてはさらに深めて検討しなければならないと考えている。

なお、「私たちには日本の友だちがいます」と綴った子は、私にとっては最高のフレネ文化を見せてくれた。その文を、活字を拾い、フレネ式簡易印刷機で印刷してくれたのである。

る。

セレスト小学校から学んだことはその他にも数多くある。だが、「異文化」と交わり、「平和」と「寛容」との市民的資質を育成するために「想像力」がどれほど大切な「学び」の活動であるのか、という目的のもとでは、書き尽くすことができたように思われる。

[追記] 文中に登場するジュリエットが中学校段階に進もうとしている時期、母親は、リュセット式教育が中等教育段階でも実施されることを願って、他の多くの有志とともに、フレネ教育方式の中学校設立運動の先頭に立った。その願いはかなったと伝え聞いているが、現地調査はいまだしていない。